

平成艸紙



おりおりの記

墓じまい

日本投資顧問業協会
副会長

岡田 則之

兵庫県の日本海側にある先祖代々の墓を、昨年の秋に墓じまいした。

そもそものきっかけは、数年前に父が脳出血で倒れて東京に引き取らざるを得なくなり、実家が空き家になったことだった。我が田舎は東京から片道半日以上かかるため、帰省は容易ではない。父の面倒も見なければならず、地元のしきたりに沿ったお墓の管理はとても無理だと判断し、永代供養にしてもらおうと菩提寺まで出かけた。

子供のころから知っているご住職に話を切り出すと、我が宗派には永代供養というものはないと言われた。これは困ったと事情を説明申し上げると「では墓を移したらどうですか」と先方から提案された。

就職で都会に出てきた息子世代が郷里の墓を住まいの近くに移転しようとして菩提寺とトラブルになる話は雑誌の記事などで知っていたので、正直この展開には驚いた。しかし、ご住職の話を聞くにつれ先方の事情も理解できた。

私は生まれ育った郷里に愛着があるから、墓が遠くても不十分ながら面倒を見ようとする。しかし、私が亡くなった後はどうなるのだろう。我が子にとっては帰省のたびに來ている町だが、將來ひとりで田舎を訪ねて墓の面倒を見続けるだろうか。更にもその子、つまり私の孫の代はどうだろう。ご住職が懸念しておられるのは、まさにその点だった。

実際、子供が就職で田舎を出て行った後、孫以

降の代になって見捨てられ放置される墓は多いらしい。言われてみて気付いたが、さほど広くない墓地のあちこちに、案内板を取り付けた墓石がぼつぼつと

ある。「この墓の縁者をご存知の方はお知らせ下さい」と書かれている。こうして一定期間掲示した後、お寺の負担で墓石を撤去することになるという。私も墓じまいをして分かったが、墓石の撤去費は何万円ではすまない。さほど収入のない田舎のお寺にとってかなりの痛手だが、荒れて朽ちていく墓石を放ってはおけない。

昨今、地方の疲弊が言われ、人口減少、高齢化、地場産業の衰退などが取り上げられるが、お墓の問題もひとつの現れなのだろう。地方で廃寺となるお寺が増えているのもむべなるかなという気がする。

墓じまいの話は、ともすると都会に住む息子世代の視点から語られることが多いが、田舎の菩提寺の置かれた立場から見れば、また別の風景が見えてくる。自分の故郷の未來について、色々と考えさせられる墓じまいであった。

